

天理大学附属天理参考館と連携したプロジェクト学習の実践

－奈良学園大学社会科教育ゼミの取り組み事例－

Practice of Project Based Learning in Collaboration with Tenri University Sankokan Museum

Example of Nara Gakuen University's Social Studies Education Seminar

澁谷 友和*・中尾 徳仁

Tomokazu SHIBUTANI* and Norihito NAKAO

要旨

本稿の目的は、小学校教員養成課程で学ぶ学生の学びの場として、博物館の活用が必要であるという立場に立ち、本学と同じ奈良県内にある天理大学附属天理参考館との連携を事例に、博物館を活用した教育活動を展開する力を育成するための大学における実践の形態や内容について検討を加えることである。

現行の小学校学習指導要領では、博物館や資料館などの施設の活用を重視しているが、学校現場における博物館活用のあり方に関しては「ビジョンやノウハウを持ち得ていない（田尻 2016）」という課題が指摘されている。従って、教員は、児童の学びの深化を図るために博物館の活用を年間指導計画に明確に位置付け、教育活動を展開する力を身につけておく必要があるが、本学においてそのような教育活動は十分とは言い難い。

このような本学の学生の状況を改善するには、どのような取り組みが効果的なのかを検証するため、本年度は、学部3年次に開講している「人間教育学ゼミナールⅠ（社会科教育ゼミ）」の一部に博物館との連携を取り入れた内容を設定し、受講生に取り組んでもらうことにした。その内容は、ただ博物館を見学するだけではなく、博物館の抱えている課題を発見し、その課題を解決する方法を提案するプロジェクト学習を取り入れるというものである。これにより、博物館展示物をどのような視点で児童に観察させるのか、どのような授業を構成するのか等を考える場面が生み出され、小学校現場における博物館の活用方法や6年生社会科の内容構成も把握することができ、田尻が指摘していた「ビジョンやノウハウを持ち得ていない」という課題に対する示唆を得ることができた。

キーワード：博物館と大学教育との連携、プロジェクト学習（Project Based Learning）、天理大学附属天理参考館、社会科教育

I. 問題の所在

現行の小学校学習指導要領では、児童の主体的・対話的で深い学びを実現するために、「総合的な学習の時間」及び「社会」「理科」等の各教科で、地域の博物館の活用が提示されている。中でも社会科においては、内容の取扱いの配慮事項として「博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについて調査活動を取り入れるようにすること」と示されており、博物館を積極的に活用し、児童の学びの深化を図る活動が重視されている（平成29年版小学校学習指導要領解説社会編 p.144）。木下ほか（2007）は、「実物資

料的な学習資源、専門指導的な学習資源を有する博物館では、通常の学校教育では得がたい学習環境や専門家の参加を望むことができる」と述べ、学びの場としての価値を述べている。

一方、学校現場における博物館の活用に関しては増加傾向にあるが、課題も指摘されている。木下ほか（2007）は、学校の博物館利用に関して、「各学校が準備したワークシートを使って展示品を見て回る展示見学型に偏っている」と指摘している。また、田尻（2016）は、「学校と博物館の連携が双方向的な取り組みに発展しないのは、学校自体が、博物館との活動を学校の教育活動にどのように位置付けるかというビジョンやノウハウを持ち得ていないことに原因がある」と指摘し、学校と博物館の双方向的な取り組みが喫緊の課題であると述べている。

以上のことから、教員は、児童の学びの深化を図るために博物館の活用を年間指導計画に明確に位置付け、教育活動を展開する力を身につけておく必要がある。その必要性から考えると、小学校教員養成課程においては、博物館等で学習する機会を設定することが求められよう。

本研究では、小学校教員養成課程で学ぶ学生の学びの場として博物館の活用が必要であるという立場に立ち、本学と同じ奈良県内にある天理大学附属天理参考館との連携を事例に、博物館を活用した教育活動を展開する力を育成するための大学における授業内容の計画および実践を行い、実践の形態や内容について検討を加えることを目的とする。

（澁谷友和）

II. 博物館と大学教育との連携

小学校現場において、博物館を積極的に活用し児童の学びの深化を図る活動が重視されているが、一方で、伊藤（2013）は「教員養成系学部学生の多くが文系出身であり、博物館や科学館の利用経験が乏しい学生も多い」と指摘している。このような学生が小学校現場に新採用で赴任した場合、郷土博物館や民俗博物館等、博物館を活用した授業を展開しなくてはならないが、なかなか具体的な活用方法が思い浮かばず右往左往していることは想像に難くない。担任している児童を博物館に連れては行くものの、あとは学芸員任せになり、その場だけの学習にとどまってしまう、博物館での体験が後の学習につながらない可能性も出てくる。従って、教員養成系学部において博物館と連携した講義内容を盛り込み、学生自身が博物館を体験することはもちろん、博物館展示物をどのような視点で児童に観察させるのか、どのような授業を構成するのか等を考える場面が必要であろう。

菊池（2012）は、大学の授業の中で博物館を利用し、所蔵されている文化遺産を活用した学習効果の有効性を述べている。小学校教員養成課程における社会科指導法の授業の中で博物館を利用し、そこに所蔵されている縄文時代の出土品を用い、その出土場所を地図にプロットさせる取り組みを行った結果、学生の社会的認識を深める学習効果を得られた上で、博物館資料の認識の深化やそれに対する興味関心も高められたという。このような経験をした学生は、学校現場に赴任した際、博物館を活用した授業構成の見通しが持ちやすいと考える。

筆者が勤務する奈良学園大学人間教育学部は、5専修（幼稚園専修・小学校専修・中等国語専修・中等数学専修・中等音楽専修）で構成されている。菊池が述べている成果を考えると、本学の小学校教員養成課程の授業においても、博物館を利用した授業が必要であるが、本学においてそのような教育活動は十分とは言い難い。

社会科の授業を作っていく際に、学習指導要領で示されている「博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについて調査活動を取り入れた」探究型の授業構成を意識していかなければならない。しかし、本学の学生の状況を考えると、博物館を活用した教育活動を展開できる力を身につけることがなく、博物館に関する経験が乏しいまま小学校現場に赴任することになり、田尻（2016）が指摘する「学校と博物館の連携が双方向的な取り組みに発展しない」「ビジョンやノウハウを持ち得ていない」という課題を解決するどころか、経験の乏しい教員をさらに増やすことにつながるだろう。このような本学の学生の状況を改善するに

はどのような取り組みが効果的なのかを検証するため、本年度は、学部3年次に開講している「人間教育学ゼミナールⅠ（社会科教育ゼミ）」の一部に博物館との連携を取り入れた内容を設定し、受講生（いわゆるゼミ生）に取り組んでもらうことにした。その内容は、ただ博物館を見学するだけではなく、博物館の抱えている課題を発見し、その課題を解決する方法を提案するプロジェクト学習（Project Based Learning: PBL）を通して、社会科の授業づくりに必要となる「調査活動を取り入れた探究型の授業を構成する力」を身につけるといえるものである。

（澁谷友和）

Ⅲ. プロジェクト学習（Project Based Learning）

現在の子どもたちが生きていく時代は、VUCA（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）の時代と呼ばれ、不安定で、不確実で、複雑で、あいまいな予測不可能な時代といわれる。このような社会が急速に変化する中で、美馬（2018）は「知識や技能の伝達ではなく、対話を通して、自らの知識や経験、他者の知識や経験を吟味しつつ、探求の方法やそれに向かう思考の態度の形成」が必要と指摘し、大学教育の中でプロジェクト学習の重要性を指摘している。

美馬（2018）は、大学教育でのプロジェクト学習について、「中心となる考え方やテーマを核にした学習方法で、実社会に根ざした問題群を解決するために、学生が複数人でチームを組み、共同で探求する仕組み」であると述べている。教員が課題を与え、それについて調べていくというよりは、実社会で問題となっているテーマを見つけ出し、チームを組んで課題解決をめざす学習スタイルといえよう。美馬（2018）は、プロジェクト学習の特色として「チームの仲間、教員、地域や企業の方々などとのさまざまな出会いやコミュニケーションを重ねる過程」をあげている。その過程において「ものの見方や資料・データの収集と分析、議論の進め方、他者への理解や共感、プレゼンテーション力などが磨かれていく」と述べる。

また、美馬（2018）は、「プロジェクト学習には、最終的にできあがったプロジェクトの成果を社会に還元していくところまで含まれる」と述べ、「実際に社会で利用するまでに到達せずとも、学外の、例えば関係する団体、市役所や企業、医療機関に対して、提案する、報告する」必要性を示している。このような活動を通して、学生自身が、平成29年告示小学校学習指導要領改訂の基本方針で示されている「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を達成するために、小学校現場でどのような授業を構成すればよいのかという学びを蓄積していくことができよう。

（澁谷友和）

Ⅳ. 天理大学附属天理参考館の沿革

天理大学附属天理参考館（以下、天理参考館）は、天理外国語学校（天理大学の前身）の教材室として、1930年に「海外事情参考品室」を設けたことに始まる。天理外国語学校は、天理教を海外へ布教する人材を育成するため、学生たちに外国語を教える目的で建学された。

天理教二代真柱（天理教の代表者）の中山正善は、「外国語習得のためにはその言葉の背景にある文化への理解が必要」と考えた。そして文化を知る方法として、海外から持ち帰った生活資料を学生に見てもらうことを発案した。このような考えから始まった収集は、日本を含め世界中の民族資料と考古資料に及んだ。

戦時中は建物が海軍に接収されたこともあり、天理参考館は数回の移転を余儀なくされた。1955年にはおやさとやかた東左第三棟4・5階に移転し、その翌年から一般公開を開始する。2001年には現在の建物（天理市守目堂町250番地）に移転し、近代的な設備を持つ博物館としてリニューアルオープンした。なお、1962年には東京

での展示を目的とした「天理ギャラリー」（東京都千代田区神田錦町）が開設され、現在も年2回の展示活動を継続している。

2022年時点では、天理参考館設立の契機となった海外民族資料をはじめ、考古美術資料、日本民俗資料、交通資料などを合わせて30万点を越える資料を所蔵し、約3000点を常設展示している。それらに加えて年4回の企画展や各種講演会、およびワークショップなどのイベントを行っている。

表1 天理大学附属天理参考館沿革

年	沿革
1930年	天理中学校東控室で、二代真柱の収集した中国民俗資料の展示が「支那風俗展覧会」として行われた。展示終了の翌日、それらの資料を天理外国語学校の本館（現天理大学1号棟）4階中央の教室に収蔵し、「海外事情参考品室」とする。
1934年	海外事情参考品室を、天理外国語学校3階北側の3教室へ移転する。
1938年	海外事情参考品室を東屋敷工作場に移転し、名称を「海外事情参考品館」とする。
1943年	海軍の接収により、天理教館へ移転する。
1944年	天理教館も海軍の接収となり、資料は天理教会本部神殿回廊と天理図書館へ移される。
1946年	海軍の解体により、東屋敷の建物へ戻る。
1950年	天理大学の附属施設となり「天理大学附属天理参考館」となる。天理大学かんす山校舎の中へ移転する。
1955年	おやさとやかた東左第三棟4・5階に移転し、仮設展示を行う。
1956年	天理教教祖70年祭を記念し、常設展示として一般公開する。文部省より博物館相当施設としての指定を受ける。
1962年	東京天理教館9階に「天理ギャラリー」が開設される。
2001年	おやさとやかた南右第一棟に移転し、リニューアルオープンする。

（天理参考館編『天理参考館常設展示図録』をもとに中尾作成）

（中尾徳仁）

V. 天理大学附属天理参考館が抱えている課題

天理参考館が現在抱えている課題で、主なものは以下の2点である。

- ①若年層の来館者が少ないこと
- ②学校教育との連携の不足

①の課題については、2019年を例にとると、大人用入館券の購入者（5,406名）に対し、小・中学生用入館券の購入者（234人）は約4.3%である（ただし無料入館や団体入館者などを省いた概算であるため正確な数字ではない）。講演会やワークショップなどのイベントが平日開催の場合も多いため、学生の参加が難しいのはある程度やむを得ない。しかし土日祝日の開催であっても、やはり若年層の入館者数は少ない。

また②の課題については、主に「A. 学校教育における時間と予算の不足」、および「B. 社会科以外の授業に対する博物館利用の少なさ」という2つの原因がある。Aについては、教師に博物館連携の相談をすると、「現状のカリキュラムでは授業を期末までに終わらせることに必死で、博物館に行く時間的余裕がない」という意見をしばしば聞く。また、学校から徒歩で博物館へ行くのは時間のロスが大きいが、移動のためにバスをチャーターするほどの予算はないという。

またBについては、当館では主に「社会科」の授業で考古美術資料と日本民俗資料を見学することが多い。過

去には「北海道へ修学旅行に行く事前学習としてアイヌ関係資料を見る」、「昔の暮らしを学ぶ一環として古い農具や家電、カマドなどを見る」、「歴史授業の一環として縄文土器や弥生土器を見る」などの利用例がある。ただ、社会科以外の科目での博物館利用はほとんど無い。

上記の2つの課題に対して、天理参考館では以下の対策を取っている。

(対策1) ツイッターなどのSNSを活用した展覧会やイベントの告知

従来は、主にポスターとチラシによる集客・告知を行っていたが、インターネット検索を多用する若年層に情報を届けるため、数年前からツイッターによる発信を始めた。講演会、イベント、企画展などの情報を「つぶやく」ことで、フォロワーの数や掲載情報の拡散が増えるなどの効果が見られた。今後は「どのような発信をすれば若年層の来館を促すことができるか」について、学生からも広く意見を求めたいと考えている。

(対策2) 社会科以外の授業における博物館利用の提案

社会科以外での博物館利用を促すことで、授業との連携をさらに深めることができると推測される。例えば天理参考館では以下のような案を検討中である。

- ・「音楽」の授業で、さまざまな民族楽器を見せる。
- ・「家庭科」の授業で、世界各地で製作された織物や織機を見せる。
- ・「理科」の授業で、火打ち石（発火のしくみ）、昔のガラス、陶磁器（焼き物製作）など、科学の発展を示す資料を見せる。
- ・「美術」の授業で、ピカソらが作品の参考にしたと言われる、ニューギニア資料に描かれた模様「プリミティブアート（原始芸術）」を見せる。

以上、2つの課題に対する天理参考館の対策について述べた。ただし学校教育と博物館との連携不足の最大の要因は、教師および博物館スタッフにそれらに対するノウハウがほとんど無いことであろう。博物館は今後も学校側に積極的に働きかけて授業との連携を進め、実践経験を重ねつつ効果的な方法を模索する必要がある。

(中尾徳仁)

VI. 社会科教育ゼミ内で取り組んだ天理大学附属天理参考館と連携したプロジェクト学習の内容

ここでは、ゼミ生が取り組んだプロジェクト学習の内容と経過を述べていく。

1. 天理大学附属天理参考館への見学

2022年5月13日（金）に、天理参考館の見学を行った。まず、ゼミ生に対し、中尾のほうから天理参考館の沿革や現状を話した後、ゼミ生との意見交流を行った。意見交流の中で「なぜ、天理参考館の来客数が減っているの



写真1：中尾学芸員の説明を聞くゼミ生の様子（瀧谷撮影）

か。」「子どもの集客数を増やすことができないのか。」というような課題が浮かび上がってきたので、プロジェクトの目標を「天理参考館の集客数（主に子どもの数）を増やす方法を考える」と設定し、「天理参考館集客増プロジェクト」の取り組みがスタートした。プロジェクトの目標が明確になったところで、展示物の見学を行った。プロジェクトのスタートとして、ゼミ生たちには、「小学校の授業で使えそうな展示物を探してみよう。」「小学生が活動的に学べる方法を考えよう。」「小学生を引率してきたら、どの展示物に着目させると興味を持つだろうか。」という視点

をもたせて見学活動を行ったが、ただ博物館を見学する取り組みを入れるだけではなく、今回のようにプロジェクトを設定することで、学生が主体的に動き出すということを見取ることができた。

2. プロジェクト成果報告会

天理参考館へ見学以降のゼミでは、6月30日（木）に設定したプロジェクトの成果報告に向けて、取り組みを進めた（5月26日、6月2日、6月9日、6月23日の4回）。ゼミ生は、集客増（主に子どもたちの集客に視点をあてて）の方法として3つの方法を考え、取り組みを進めた。1つ目は「年表ワークシート」の活用である。展示品を見ながら、クイズ感覚で年表ワークシートに答えを書きながら館内をまわるという企画（提案例として電話機を取り上げていた）である。2つ目は「おみやげコーナーの充実」である。学校教育と直接関係はないかもしれないが、「売れるPOP」を考え、実際にPOPを作成する取り組みを進めていた。3つ目は「小学生にわかりやすい展示」である。小学生にわかりやすい展示が集客数増につながるのではないかと仮説を立て、先行調査の分析等を通して、どのような展示方法が効果的なのかということを考え、取り組みを進めていた。



写真2：プロジェクトの発表をする学生（澁谷撮影）



写真3：プロジェクトに対するコメントをする場面（澁谷撮影）

ゼミ生たちが考えた「小学生にわかりやすい展示」とは、「教科書コーナー」と設置することである。これは、ゼミ生たちが実際見学して感じた「天理参考館の展示物がすごいということはわかったけど、子どもたちが「これ知っている！」という出会い感がなく、一目でわかりづらい」という視点から考えられたものである。そこで「教科書に載っているものを集めてコーナー化しちゃおう！」という企画が生まれてきた。ゼミ生たちが調べた先行調査「第一生命 NEWS 宅配便：首都圏在住の小中学生の親に聞いた『美術館・博物館の利用に関するアンケート調査』（2006）では、美術館や博物館によく行く理由として「教育のためになる」「展示物が面白い」「子どもたちが楽しめる」ということがあげられており、そこから「教科書コーナー」の設置の利点を導きだしている。それは、「教科書×展示物⇒教育のためになる」であるとし、「教科書に載っているものを実際に発見することで、面白い、楽しい」につなげることができるということである。

また、先行調査では、親が子ども時代に博物館に連れてってもらったことがあるという経験の有無が、子どもの博物館来場に関わることを示唆しており、ゼミ生たちは、その点からも「親世代にも、懐かしいと思ってもらえる」教科書コーナーの有効性を指摘している。さらに、先行調査は、博物館への要望として「学校教育との連携」「子どもにもわかりやすい展示の工夫」があることを明らかにしており、その点においても、ゼミ生たちが考えた「教科書コーナー」は合致するものである。教科書コーナーの展示物案を考える際に、ゼミ生たちは、平成29年版小学校学習指導要領解説社会編の記述、各教科書会社が発行する6年生の歴史分野の教科書の写真、天理参考館の所蔵物と照らし合わせながら展示物の選定（案）を行っていた。そこでは、銅鏡、土偶、縄文土器、釣針、銚頭、

銅鐸、埴輪などを選定する学生たちの姿を見ることができた。この選定活動の中で、博物館展示物をどのような視点で児童に観察させるのか、どのような授業を構成するのか等を考える場面が生み出され、小学校現場における博物館の活用方法もイメージできたと思われる。プロジェクトを進める中で、6年生社会科の内容構成も把握することができたと思われ、田尻（2016）が指摘していた「ビジョンやノウハウを持ち得ていない」という課題に対する示唆を得ることができた。

3. 天理参考館の所有物を活用した授業実践例－明治政府が開通させた日本初の鉄道の場合－

天理参考館は、およそ30万点の資料を収蔵している。実際に博物館の資料を活用して、どのような授業を構成することができるのだろうか。ここでは、澁谷が天理参考館学芸員の中尾と開発した、天理参考館に所蔵されている展示品を具体的に活用した授業実践例を提案する。本授業例は、第6学年単元「明治の新しい国づくり」に位置づけることができる。本単元では、「日本の近代化について、世の中の様子、人物の動きや代表的な文化遺産などに着目し、地図や資料等を調べることを通して、我が国が明治維新を機に欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めていったことを理解する」ことが目標となる。本単元は5時間で構成される（表2）。

表2 第6学年単元「明治の新しい国づくり」単元計画

時	学習課題	目標：獲得させたい知識等
1	資料を比べて、江戸から明治にかけてどのように社会が変化したのだろうか。	江戸時代と明治時代の写真や絵画（例：建物、学校、まちの様子など）を比較し、変化をとらえる中で、誰が、どのように国づくりを進めていったのかという単元全体の学習課題を設定する。
2	ペリーの来航をきっかけに、社会はどのように変化したのだろうか。	ペリーが率いる米国艦隊の来航をきっかけに、開国したことによる国内の混乱、江戸幕府による政権の返上後、明治新政府が誕生したことを理解する。
3	新しい明治政府は、どのような国づくりをめざしたのだろうか。	大久保利通や木戸孝允らによって、明治天皇を中心とした新政府がつかられ、廃藩置県や四民平等、富国強兵などの諸改革が進み、近代国家としての新しい政治の仕組みが整えられたことを理解する。
4	文明開化により、人々の生活はどのように変化したのだろうか。	西洋の制度や技術が導入されたことにより、人々の生活が大きく変化したことを理解する。
5	鉄道が開業した時の切符には、なぜ外国語も使われているのだろうか。	明治政府が取り組んだ新橋・横浜間の鉄道開通に着目し、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進め、欧米に対抗する国力の充実を図ったことを理解する。

（澁谷作成）

本稿で提案する鉄道は1872年に開通し、本年2022年で開通150年を迎える。開通当時は新橋・横浜間29kmであったが、それまでの移手段を大きく変化させたものであり、文明開化の象徴といえるものであろう。天理参考館には、鉄道に関する貴重な資料がある。提案する授業では、その資料の一部を活用することで、児童の興味・関心を引き出し、鉄道開通を事例に明治時代の変化を学習する（表3）。

授業の導入部分では、天理参考館所蔵の錦絵「東京上野鉄道開業式諸民拝見之図」を児童に提示する。図から、明治時代に鉄道という新しい交通機関が登場したことで、人々の生活が変化したことをとらえる。次に、「一等片道乗車券」を提示し、乗車券の面に印字されている文字（日本語以外にも英語、フランス語、ドイツ語で書かれて

表3 「明治の新しい国づくり」第5時間目授業計画

時間	○学習内容 ・学習活動	予想される児童の反応	●指導上の留意点 ◎評価規準（評価方法）
導入 12分	<p>○前時の復習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治政府の諸政策をふり返る <p>発問1 明治政府は富国強兵のために、どんな政策を実行しましたか。</p> <p>○日本で鉄道が開通した時の様子</p> <p>発問2 明治時代の大きな変化が描かれている図ですが、何が描かれていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天理参考館所蔵の錦絵「東京上野鉄道開業式諸民拝見之図」の図を見て考える。 <p>発問3 日本で初めて鉄道が開通した時の切符を見て、どんなことがわかりますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天理参考館所蔵の一等片道乗車券（明治5～9年）を見て、印字されていることから情報を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・富岡製糸場のような工業をさかんにした。 ・徴兵して軍隊を作った。 ・地租改正を行って、国の収入を安定させた。 など ・東京駅 ・蒸気機関車 ・洋服を着た人、和服を着た人が見ている。 ・横浜から川崎までの切符 ・一番いい席の切符 ・日本語以外の外国語も書かれている。 ・英語、フランス語、ドイツ語で書かれている。 ・いろんな外国語で書かれ、今とは違い不思議だな。 など 	<ul style="list-style-type: none"> ●欧米諸国に追いつこうとする政治のあり方を確認する。 ●天理参考館所蔵の錦絵「東京上野鉄道開業式諸民拝見之図」の実物を見せる（図1）。 ◎天理参考館所蔵の「一等片道乗車券」実物を見て（図2）書かれている内容を読み取ることができる（ワークシートへの記述内容）。
展開 25分	<p>学習課題：鉄道が開業した時の切符には、なぜ外国語も使われているのだろうか。</p> <p>○日本初の鉄道開通の道のり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・政府が鉄道を開通させた理由を考えるために、以下の課題について調べまとめていく。 <p>発問4 鉄道ができると何が便利になりますか。</p> <p>発問5 最初に開通した新橋横浜間はどのくらいの時間で走りましたか。</p> <p>発問6 明治政府が誕生して、何年で開通しましたか。</p> <p>発問7 鉄道の利用料はどのくらいですか。</p> <p>発問8 鉄道を開通させるのにどのくらいの費用がかかりましたか。</p> <p>○近代化の象徴としての鉄道</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べたことをもとに考え、意見交 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動が速くなる。 ・人が歩くと一日の距離を35分で走った。 ・1872年に開通なので、わずか5年。 ・1等～3等で値段が違う。 ・国家予算の1.5倍 	<ul style="list-style-type: none"> ◎資料集を活用し、必要な情報を読み取ることができる（ワークシートへの記述内容）。 ●天理参考館所蔵の「鉄道列車出発時刻及賃金表」の実物（図3）を見せる。 ◎既習内容から自分の意見を書

	<p>流をする。</p> <p>発問9 明治政府が誕生してわずか5年というスピードで鉄道を開通させたわけですが、政府内や国民の中で開通に反対する人はいなかったのだろうか。</p> <p>(政府内・国民の立場別々に考えさせる)</p> <p>・伊藤博文、大隈重信が鉄道開通を推進したわけを考える。</p> <p>発問10 鉄道開通が日本にどのような良い影響をあたえるのだろうか。</p>	<p>(政府内)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・反対する人はいたと思う。富国強兵をめざしていたから、先に軍隊を強くするべき。など (国民) ・明治に代わってからも、各地で世直し一揆などが起きているから、税金を下げしてほしい。など <p>・5年で鉄道を開通させる技術があることを、欧米に見せられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欧米に追いつきたい。 ・西洋化して追いついているところを、欧米に見せられる。 ・ものや人がたくさん運べる。 ・工業が発展する。そうすると豊かになる。 ・新しい世の中になったことをアピールできる。 	<p>くことができる(ワークシートへの記述内容)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●西郷隆盛、大久保利通、軍部は列強に対抗できる軍備の優先を訴えたことを補足しておく。 ●鉄道開設のための土地の取得も反対にあい難航したことを補足しておく。 ●明治政府が誕生して5年で鉄道を開設させたことをふり返しておく。 ●文明開化という言葉も補足しておく。 <p>◎既習内容から自分の意見を書くことができる(ワークシートへの記述)。</p>
<p>明治政府にとって鉄道開通は、近代化の象徴であり、産業を発展させ、経済や軍事面で欧米に対抗する国力を持ちつつあることを内外にアピールするねらいがあった。</p>			
<p>まとめ 8分</p>	<p>○学習課題についてまとめる。</p> <p>発問11 学習課題「なぜ、鉄道が開業した時の切符には外国語も使われているのだろうか。」に対する考えを、学習内容をふり返りながらまとめよう。</p> <p>○今後の自由探究課題を伝える。</p> <p>探究課題 新橋・横浜間の開業以降、鉄道はどのように発達したのだろうか。</p>	<p>(記述例)</p> <p>明治政府は、近代化の象徴として、新政府が誕生してわずか5年で、新橋・横浜間に鉄道を開通させた。これは欧米に対抗できる国力を持ちつつあることをアピールするねらいがあり、そのため切符にも外国語が使われている。</p>	<p>◎「近代化」「新橋・横浜間の鉄道開通」「欧米への対抗」などの学習の中心となるキーワードを使ってまとめることができる(ワークシートの記述内容)。</p> <p>●天理参考館所蔵の「大阪電気軌道片道券」の実物(図4)を見せ、鉄道が全国に広まってきたという予想を立てさせる。</p>

(澁谷作成)

いる)から学習課題を設定していく。

授業の展開部分の始めでは、「鉄道列車出発時刻及賃金表」を提示し、当時の鉄道の運行状況や運賃を確認する中で、これまで一日かけて歩いて移動していた距離を、わずか35分で移動している様子を読み取り、人々の移動に関する変化をとらえる。しかし、その鉄道開設には多額の費用がかかっており、当時の政府内や国民の鉄道に対する不信を考えさせ、それでも開通を推進したわけをとらえることで、「鉄道開通は、近代化の象徴であり、産業を発展させ、経済や軍事面で欧米に対抗する国力を持ちつつあることを内外にアピールするねらいがあった」という明治政府が鉄道開設にこだわったわけを理解させる。まとめでは、「大阪電気軌道片道券」を提示し、新橋・横浜間でスタートした鉄道がどのように変化していったのか予想させ、現在の鉄道への広がりを考えさせ、過去の出来事が現在の生活にも影響しているという歴史のつながりを感じながら授業を終えていく内容にしている。

以上のような博物館の実物の資料を活用した授業を展開することにより、「博物館にある資料は当時の人々の生活の様子を知る手がかりとなるものである」という児童の学びに向かう力も育成することができ、「博物館に行ってみたい」と思う児童が増え、博物館の利用回数も増えるのではないだろうか。(澁谷友和)

VII. 成果と課題

本稿では、学校教育および大学の教員養成課程における博物館活用の課題を整理した上で、今年度のゼミで博物館と連携して取り組んだ学習内容について述べてきた。連携の事例として、博物館学芸員と学生によるプロジェクト学習の展開事例、博物館学芸員と大学教員による授業モデルの開発事例を報告した。本稿の成果は、以下の3点に整理される。

- ① 博物館と学生が連携したプロジェクト学習を進めることで、田尻(2016)が指摘する、教員が「博物館を活用した教育活動を展開できるビジョンやノウハウを持ち得ていない」ということを改善できる一つの方法として有効であるという示唆を得ることができたこと。
 - ② 博物館が所蔵する実物の収蔵品を活用した社会科の授業モデルを示し、博物館収蔵物の具体的な活用事例を提案できたこと。
 - ③ 博物館学芸員と学生との意見交換はごく短期間であったにも関わらず、「教科書コーナーの設置」などの斬新な提案がなされた。このことから、本稿で述べたような交流・学習を継続することで、実際に博物館の集客増や博学連携の推進に貢献するアイデアが、学生の意見から生まれる可能性のあることが明らかになったこと。
- なお、今後の課題は以下の点である。

今回の博物館との連携は、ゼミ単位での連携にとどまっているため、より多くの本学学生の「博物館を活用する力」を育成するためには、大学の科目単位(例えば社会科の指導法など)でどのような連携が可能か検討することを今後の課題としたい。

(澁谷友和・中尾徳仁)

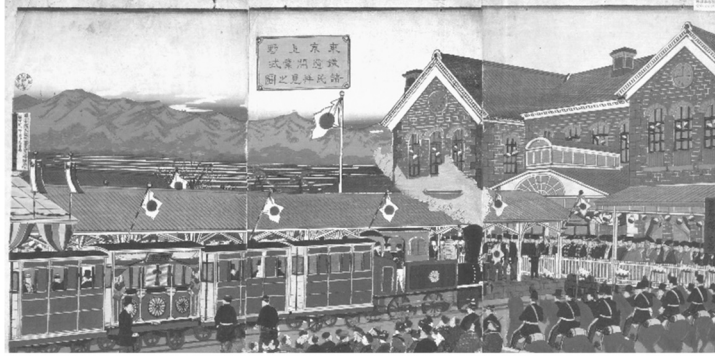


図1 錦絵「東京上野鉄道開業式諸民拝見之図」(天理参考館所蔵)

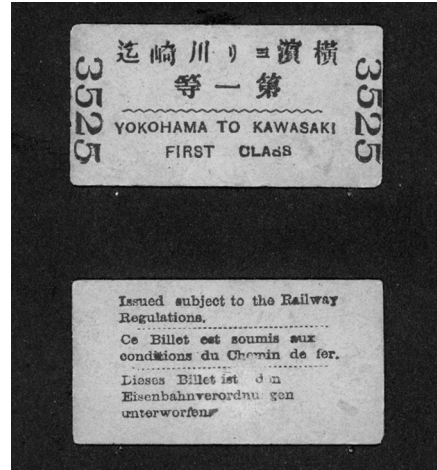


図2 「一等片道乗車券」(天理参考館所蔵)

小兒四才迄ハ無賃十二才迄ハ半賃金小包 朋胤ノ類ハ無賃其餘目方三十斤迄ハ二十五錢三十斤以上六十斤迄ハ五十錢一入六十斤迄ハ一限ル	表金賃		車ノ等級	
	下等	中等	上等	上等
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同

図3 「鐵道列車出發時刻及賃金表」(天理参考館所蔵)

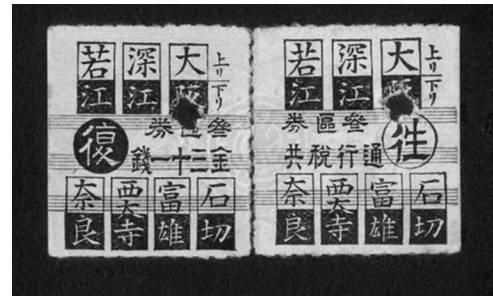


図4 「大阪電気軌道片道券」(天理参考館所蔵)

付記

本稿で使用した天理参考館の鉄道に関する資料、写真に関しては、学芸員の乾誠二氏にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。また、本稿の中で紹介したプロジェクト学習に取り組んでくれたゼミ生（酒井彩優さん、末綱匠吾さん、山本大成さん、吉川拓摩さん）のおかげで、大学教育における博物館との連携に関してたくさんの示唆を得ることができました。ゼミ生のみなさまにも謹んで感謝申し上げます。

文献 (References)

- 1) 伊藤信成「プラネタリウムを通した博物館と教員養成学部との連携」『第27回天文教育研究会(2013年天文教育普及研究会年会)集録』2013年. pp.184-187.
- 2) 菊池達夫「小学校教育養成課程における文化遺産の教材活用と効果—社会科指導法の博物館授業を通じて—」『北翔大学北方圏学術情報センター年報』第4巻 2012年. pp.15-24.
- 3) 木下裕也・中村公一・中野正俊・木下孝弘・鈴木真理子「琵琶湖博物館と連携した体験学習プログラムの開発と評価—小学校社会科「くらしのうつりかわり」を題材に—」『滋賀大学教育学部紀要 教育科学』第57号 2007年. pp.177-190.
- 4) 田尻信壹「博物館と学校カリキュラム」『国立民族学博物館調査報告』138巻 2016年. pp.11-19.
- 5) 第一生命 NEWS 宅配便「首都圏在住の小中学生の親に聞いた「美術館・博物館の利用に関するアンケート調査」第一生命 2006年 <https://www.dlri.co.jp/pdf/ld/01-14/news0611.pdf> (最終閲覧日 2022年9月23日)

- 6) 天理参考館編『天理参考館常設展示図録』天理参考館 2001年.
- 7) 美馬のゆり編著『未来を創る「プロジェクト学習」のデザイン』公立はこだて未来大学出版会 2018年.
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社 2018年.
- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編(平成29年告示)』日本文教出版 2018年.